

今世衣服の紋といふ事出来し後に、丸の内にさまゝ形を書なせるに依て、かやうの事も思ひよれるにや、古へ旌旗幔幕の紋にては、此意かなひ難しといふべし。

〔老談一言記〕岩松萬次郎殿物語に、家に七ヶの秘事あり、是はさて秘事にてはなけれども、庶流にて、嫡流たるよしいふ間、秘する也、たとへば御當家御紋、三田町白とて、二田町は黒、三田町は白し、是新田の二ツ引の紋なり、岩松は中ぐる也、是は三田町白の中を合せたる物にて、中ぐるの紋也、略七ヶの秘事、かやうの類也。

〔太平記十五〕主上自山門還幸事

同建武二年二月八日、義貞朝臣豊嶋打出ノ合戦ニ打勝テ、則朝敵ヲ萬里ノ波ニ漂セ、同降人ノ五刑ノ難ヲ宥テ、京都へ歸給フ、事ノ體ユ、シクゾ見ヘタリケル、其時ノ降人一萬餘騎、皆元ノ笠符ノ文

ヲ書直シテ、著タリケルガ、墨ノ濃キ薄キ程見ヘテ、アラハニシルカリケルニヤ、其次ノ日五條ノ辻ニ高札ヲ立テ、一首ノ歌ヲゾ書タリケル、  
二筋ノ中ノ白ミヲ塗隠シ新田々々シゲナ笠符哉

〔諸家系圖纂三十四〕正木家譜  
家紋九曜星

〔有徳院殿御實紀附録十七〕

ある時、小姓岡村丹後守直純をもて、大目附有馬出羽守純珍に仰ありけるは、釘拔松河黄紫紅といへるは、三浦家の紋なるよしいかなる子細あることにか、阿部豊後守信峯が家人松原左大夫留守居役は、何事となく老練の者にて、諸家にも廣く往來すと聞けり、汝が申すごとくにして彼に尋ぬべしとなり、出羽守うけたまはり、其夜松原がもとに赴き、かくと申けるに、松原も譜記すべきにあらざれば、つぎの日、三浦志摩守義理が家にもとひ、又諸家をも尋たるに、三浦が先祖平六左衛門義村が、常に用ひし幕、五布の内の中、三布を黄紫紅にそめ、上